

シリーズ 3、富山で育つ宿根草の組み合わせとデザイン⑫

職藝学院

教授 渡邊美保子

フジバカマ

フジバカマは、日本の宿根草というイメージがありますが、奈良時代に中国から渡ってきた植物といわれています。万葉集では秋の七草として詠まれ、紫式部の源氏物語にも登場するほどですから、千二百年余りの間、日本人に長く親しまれてきた植物です。現在では環境の変化により自生しているものは少なくなり、絶滅危惧種に指定されていますが、毎年お盆の頃にはたくさんの苗が園芸店に並びます。これは、園芸種として栽培されているもので、自生しているものに比べて花の色が濃いので見分けがつかます。



写真1：フジバカマの園芸種のつぼみ、10月初旬

フジバカマの園芸種は、9月の終わりごろから赤紫を帯びた蛍光色のピンク色のつぼみをつけはじめます。茎も赤ワイン色に染まり、3つに裂けた緑の葉っぱを茂らせて垂直に立っているその姿は、品のよい美しさを感じますが（写真1）、つぼみが開くと、抜き忘れた、ぼさぼさの仕付け糸の



写真2：フジバカマの園芸種の花、11月中旬

ようになり（写真2）、なんともひょうきんな姿になってしまいます。つぼみが色づいてから花が咲くまでが思わせぶりに長いので、同じ花とは思えない変わりように、毎年のことながら頭が混乱します。

草丈は、1mを越えるほど大きくなりますが、草丈が高くなるわりには、暴れることもなく支柱の必要もありませんし、花壇の後ろのほうに植栽できるのでとても重宝します。日当たりがよく、水はけの良い土なら簡単に栽培できます。一株植えると地下茎が横に伸びて地面を覆ってゆき、3年ほどで、ひとかたまりのグループのような増え方をします。一度グループができると、その中には雑草が入り込みませんのでお手入れも楽になります。ただし、同じ場所に植えっぱなしにしていると、茎がやせて花つきが悪くなり、草丈も短くなります。また、ある日突然に、ぱたりと枯れて茎が黒くなり溶けたように消えてゆくことがあります。フジバカマは、地表のすぐ下の浅い所に根っこを張っているため、込み合ってくると養分の取り合いをして自ら枯れてゆくためです。広がりすぎたと思ったら、茎を3本～5本くらいずつにまとめて、なるべく根に土をつけたまま株から切り離し、土壌改良をした場所に移植をします。

組み合わせは、夏から咲き始める、ピンク系のクサキョウチクトウやシュウメイギク、初秋から咲く紫色の宿根アスター、クジャクアスター（白花）などを混ぜて植栽しますと、自然風な花壇として楽しめます（写真3）。



写真3：手前から宿根アスター（紫色）、フジバカマ、シュウメイギク（ピンク）、クジャクアスター（白花）